

第1回 庄内中高一貫校（仮称）教育基本計画策定委員会 記録（概要）

1 日 時 令和元年7月11日（木）13:00～14:10

2 会 場 山形県庁 701会議室

3 参加者 委員長（座長）、副委員長、委員11名、代理出席1名

4 内 容

(1) 県教育委員会あいさつ

(2) 委員紹介

(3) 報告

- ・山形県中高一貫教育校設置構想及び田川地区の県立高校再編整備計画（第2次計画）における庄内中高一貫校（仮称）について
- ・田川地区の県立高校再編整備計画（第2次計画）及び庄内中高一貫校（仮称）に係る保護者等説明会 結果概要

(4) 協議

① 庄内中高一貫校（仮称）教育基本計画策定委員会の検討組織（案）

② 庄内中高一貫校（仮称）教育基本計画策定委員会の検討内容（案）及び検討計画（案）

(5) 意見交換

5 発言要旨

(3) 報告

質問等なし。

(4) 協議

① 庄内中高一貫校（仮称）教育基本計画策定委員会の検討組織（案）について
意見等なし。

② 庄内中高一貫校（仮称）教育基本計画策定委員会の検討内容（案）及び検討計画（案）
について

（委 員）

先日、佐賀県の武雄青陵中学校・武雄高校という校舎分離型の併設型中高一貫教育校を視察に行ってきた。カリキュラムを作成する際に、市町村の中学校の教務主任が入って検討したところ、中高一貫教育校がどういったものかを理解してもらうことも含めて効果的だったという話があった。この点について、考慮していただけるのか。

（事務局）

ご意見として頂戴する。教育基本計画は、班会及び作業部会で原案を作成し、策定委員会で検討することとしており、教育庁の関係課とも連携して進めていくとともに、必要に応じて関係者の集まりを開催することは可能であると考えている。

（委員長）

必要に応じて会合をもつか、あるいは、事務局、作業部会等において、参考意見を聞きに行くなど、柔軟な対応が可能であると考えている。

(5) 意見交換

(委員)

鶴岡市で要望をしてきた本市への中高一貫教育校の設置について、県教育委員会において決定していただいたことに感謝申し上げたい。市としては、令和2年度の重要事業要望として、中高一貫教育校の早期開校を重点としてあげている。第2次計画では「令和6年度以降の早い時期に」としているが、令和6年度には鶴岡南高校の1学級減が示されている中で、当初の計画通り、令和6年度に開校できるように進めていただきたい。その他にも、県立中学校の入学者選抜の在り方、ハード・ソフト両面にわたる環境整備についても、この委員会で議論していただきたい。また、伝統ある鶴岡南高校、鶴岡北高校の統合校ということで、本市と深いかかわりをもつ地域の基幹校として、地域の期待もこれまで以上に高まるものとする。市内にある高等教育機関との連携、地域に根差した特色ある教育活動の展開について、本市としてもできるだけ支援をしていきたいと考えている。

(委員長)

地域の基幹校としての期待に応える、高等教育機関との連携、地域に根差した特色ある教育活動の展開等について、御支援をいただけることに、大変感謝したい。

(委員)

田川地区の県立高校再編計画（第2次計画）を決定していただいたこと、並びに本市だけでなく庄内地区5市町において説明会を実施するなど、非常に丁寧に進めていただいていることに感謝申し上げたい。

新たな選択肢となる学校を設置するということは、次代を担う人材育成、地域の発展につながるという重要な意義がある。既存の学校とともに、庄内地区や田川地区の教育がこれまで以上に充実していくものとする。

当教育委員会としても、独自に中高一貫教育校についての情報を集積しているところである。先日、佐賀県に視察に行き、四つの中高一貫教育校がある中で、校舎分離型の武雄青陵中学校、武雄高校という、庄内中高一貫校（仮称）と同じタイプの校舎分離型の併設型中高一貫教育校を訪問してきた。この視察で得た情報を発信しながら、新たな学校に対する地域の期待や要望の声を、この委員会及び県教育委員会に届けていきたい。

鶴岡南高校と鶴岡北高校が統合して新たな学校を創造していくことを踏まえ、中高一貫の6年間で学ぶ子ども達に対して質の高い教育をしていくことはもちろんのこと、高校から入る子ども達に対して魅力のある学校、入りたい学校にしていくことが重要である。併設型高校においては、併設中学校から入る内進生よりも、高校段階から入る外進生の方が多い。どの生徒にとっても魅力のある学校となるように理念の形成が重要と考える。武雄青陵中学校、武雄高校においては、理念形成に1年をかけており、ここが一番大事であり、おろそかにするとうまくいかなくなるとの話であった。

また、県立中学校が開校した折には、本市としても生徒間の交流だけではなく、教員の合同研修等、共に学ぶ機会を提供していただきたい。この委員会で、しっかりと構想を立て、未来につなげていきたいと考える。

(委員長)

高校段階から入る外進生にとっても魅力のある学校とする点については、重要なお意見であり、教員の合同研修等、共に学ぶ機会の提案についても、今後、事務局も交えて検討していくこととなると考える。

(委員)

中高一貫教育校の設置については、大きな関心事の一つである。6年間という長いスパンで、将来を見据えながらゆとりをもって継続した学習活動ができるということは、学びの多様な選択の一つとして、大きな期待がある。一方、周辺の小中学校への影響も懸念されており、ソフト面・ハード面に対する充実を求める意見も出されている。そうした声をしっかり受け止める必要がある。

中高一貫教育校の設置の根幹をなすものとして、どのような中高一貫教育校を作っていくのか、学校の理念をどのように作り上げていくのか、を議論することは重要なことと考える。今後、このようなことを明確にしていくとのことであるが、現在、課題や懸念とされている点について克服に努め、期待と可能性に込めていく必要があると考える。

先日行われた庄内地区での説明会においても、様々な意見が出されている。併設型高校における内進生と外進生については、切磋琢磨できる環境作りが必要であり、「組み合わせ」、「選択」といったものをキーワードにしながら、検討していくことも重要だと考える。

これまでも様々な意見が出されてきており、そのようなものを検証し、議論しながら、より多くの方に理解してもらえる教育基本計画を策定しなければならないと考える。今後も、県民の皆様の声を真摯に受け止め、丁寧な説明をし、意見をすり合わせながら、合意形成をしっかりと図っていくことが大切だと考える。

(委員長)

内進生と外進生について、教育課程、学級編制、行事や交流の活動などの「仕組み」作りを検討しながら、課題等を克服できるよう議論してほしい。

(委員)

庄内初の中高一貫教育校となるので、開校の後には、「できて良かった」と言われるような学校になるよう願っている。既に先行事例としてある東桜学館中学校・高校の取組みや成果に学ぶところは学び、違いを見極めながら検討できればと考える。個性や能力の伸長といった中高一貫教育校の良さを生かし、庄内初でもあることも踏まえ、地域の誇りとなるような特色ある学校作りを期待しながら検討していきたい。

また、検討にあたっては、庄内全体からの様々な視点からの検討になればありがたい。私個人としては、飽海地区の校長会の代表として参加している立場でもあるので、必要に応じて飽海地区の中学校の校長、あるいは小学校の校長の思いや願い、意見や要望等もお聞きしながら、策定委員会に伝えることができればと考えているので、それが可能となるような会議スケジュールであればありがたいと思う。

(委員長)

飽海地区の小中学校長の意見を幅広く吸い上げていただけるとの大変ありがたい御提案があり、そのことにより、庄内全体としての議論が本委員会で行われる一助になる。

(委員)

『田川地区の県立高校再編計画（第2次計画）』の庄内中高一貫校（仮称）の想定される教育上の特色の中に、「庄内の自然、産業、文化などに関わる体験活動を充実させ、地域理解を深め、郷土を愛する心を育成する」とあり、大事にさせていただきたいと考える。現在、庄内地区の2市3町の多くの小中学校において、地域学習を通して、ふるさとの良さを知り、郷土愛を育む教育活動を展開している。それを土台として、更に地域について理解を深める学習を展開することで、郷土愛を一層根付かせることができると考えている。それは、『山形県中高一貫教育校設置構想』の中にある、「未来の山形を切り拓く人間」の育成につながっていくものと考ええる。

(委員)

この度、母体となる鶴岡南高校と鶴岡北高校の統合を踏まえ、中高一貫教育校が設置される計画が動き出したことにより、保護者、教職員も安堵した状況になっていると捉えている。ここ数年、本校が様々な角度から話題になる中で、保護者や同窓会の方々にとっては、学校が新しい形になっていくことに戸惑いもあったものの、現在の課題の解決策の一つとして、この学校が設置されることについては、概ね賛同していただいております、大変ありがたいことであると感謝している。

本校は、現在2期目のSSH（スーパーサイエンスハイスクール）事業が行われているところであり、中高一貫教育校においても現在培われている力を発揮できるのか、あるいは中高一貫教育で培われた力をどうつなげていけるのかという点が、我々の課題であると捉えている。中高一貫教育校の6年間の学びにおける探究的な学習において、これまでのSSH等で培われた力は有効であると考えている。この1年をかけて教育基本計画を策定する中で、このような思いがうまく伝わっていればありがたいと思う。

また、統合した後も本校は、地域の期待を担っていけるような学校であり続けたいと思っている。進学者であっても地域を愛して、地元に戻ってくるような生徒をどう育成していくかについて、本校でも取り組んでいるところであり、この学校においても、大きなテーマとして考えていきたい。

(委員)

庄内中高一貫校（仮称）の設置にあたっては、鶴岡北高校と鶴岡南高校が統合されることになる。また、鶴岡市には、山形大学農学部、慶應義塾大学先端生命科学研究所、県の農業及び水産試験場、様々なベンチャー企業などがある。庄内の自然を生かした生命科学の分野では、世界に誇れる研究機関や企業があり、山形の勢いとなり、地域創生においても大きな役割を果たしている。言わば生命分野におけるシリコンバレーであったり、あるいは都市部と離れた郊外にありながら世界トップの大学のあるケンブリッジであったりと、世界に誇れるような学術文教都市に育つ可能性が鶴岡市にはあると考える。その学術的な環境を有しながら、文教都市とし

ての一役を担っていくのが、庄内中高一貫教育校（仮称）であると期待しているところである。

令和元年度から統合までの少なくとも5年間は、鶴岡北高校は1学年3クラス規模の学校となる。1学年4クラスから3クラスに移行する中で、今後更なる教員数の減少が予想される。そのため様々な教科で、今まで生徒が選択できていた教科科目が教員不足のため選択できない、生徒の進路希望に沿った学力を十分に伸ばせない、進路希望に合わせた授業選択ができない、そして、これまでの特色ある部活動が維持できないといった危惧がある。今後、移行期の対応を検討されることになるが、統合した時に在籍する生徒の移行期の対応を開校2年前からどうするかと考えるのではなく、令和元年度の今から統合に向けた学力の向上のための移行期が始まっていると捉え、現在の生徒に対しても、授業の選択や進路希望に添える人員配置を含めた環境整備に配慮し、万全を期していただきたい。

（委員長）

統合までのプロセスにおいて、両校、特に鶴岡北高校の小規模化という課題がある。その点のフォローについては、策定委員会だけではなく、教育委員会として、今後一つひとつ検討していかなくてはならないところである。

（委員）

高校の学習内容を一部先取りして、高いレベルの授業を実施できるということで、進学実績等において、非常に期待しているところである。大学（農学部）としては、鶴岡南高校とはSSH事業の中で、生徒が毎週農学部に来て、1～2時間ほど実験など探究的な学びの実践をしている。理科という教科は、座学ではなく実験をすることが、高校生を刺激する上で非常に大事である。今後、中高一貫教育校となれば、高校受験対策にとる時間を、実験の時間にあてられるようなカリキュラム編成の工夫ができる。

また、これまで高大連携として高校とのみプログラムを実践してきたが、併設型中学校は農学部から近く、中学生ともプログラムを実践できたら様々な刺激を与えられると考えるところである。

都会は学習内容を塾が補完しているようなこともあるが、地方においては、内進生と外進生の学習進度の違いをどのように埋めるかということも大事になってくる。そのような実態を考えずに、都会でうまくいっている中高一貫教育校を形だけ真似をすると、様々な点で難しいところも出てくると思われる。

本学の会議の中で、山形県の4年制大学の進学率が38%であり、最も高い東京（64%）と比べると、山形県はとても低い状況であることが示された。これから18歳人口が減る中で、山形大学の定員を維持するためには、20年後には60%ぐらいまで進学率が上がらなければならないとのことであった。田川地区の進学をリードする二つの高校が統合して一つになることを踏まえ、このような状況も頭に留めながら検討を進めてもらえればありがたい。

（委員）

6月18日に発生した山形県沖地震について、本市でも多くの皆様から御心配をいただいているところである。復旧・復興についても、関係各位から多大なるご支援・御協力をいただいていることに感謝申し上げたい。

その後の対応においては、県の災害対策本部から被害状況等の県のデータ・情報を逐次いただくことができたものの、県立学校の被害状況、休校の状況については、件数以外の具体的な情報をいただいていた。先日、鶴岡南高校の体育館が地震の影響で使用できないということを聞き、庄内中高一貫校（仮称）の開校後においても、本地域の生徒が通学する学校でもある点を踏まえ、災害時の県と市の情報共有は極めて重要であろうと考える。本市においても、災害時の初動対応等を今後検討していくところであるが、県教育委員会においても、外部との情報共有について、特段の御配慮をしていただきたい。

（委員長）

しっかり受け止めさせていただく。